

研究結果報告書

初期読本における漢籍受容の研究

所属： 揚州大学外国語学部
役職： 講師
氏名： 劉菲菲

本研究は書物を通じた中国文化の受容が江戸時代中期に大きく進展したことについて、その実態を解明しようとするものである。即ち、中国の白話小説を初めて日本の小説世界に取り込んだ、初期読本について、その典拠を精密に明らかにすることを目指している。典拠だけでなく、作品の生成過程や作者の創作意図をも解明する。

本年度は初期読本作家、都賀庭鐘と伊丹椿園の読本作品を中心に研究を行った。その研究成果はいずれも論文にまとめた。

(1) 都賀庭鐘読本における漢籍受容

庭鐘の読本は彼の漢学の教養が基盤となっている。庭鐘の各読本作品の場面（シーン）を大場面と小場面に分けて整理し、大場面の典拠は白話小説にあり、小場面の典拠は膨大な自筆読書抄記『過目抄』に抄録された叢書や随筆にあることに気付いた。論文「日本江戸時代対明清文学之接受—基于都贺庭钟读本小说素材来源的考察」では、明清時代の長編白話小説、類書叢書、文人の随筆の三つの方面から庭鐘読本の漢籍受容の有様を詳しく分析した上で、江戸時代中期の日本の文壇が高いレベルで漢籍を受容し、重要な文化的影響を受けていたことを論述した。

(2) 伊丹椿園読本における漢籍受容

初期読本作家のうち、都賀庭鐘や上田秋成の読本は一定の研究蓄積を有するが、伊丹椿園の読本はほとんど研究されていない状況にある。そこで、庭鐘読本研究で蓄積してきた専門知識・方法・経験を生かして、研究が遅れている伊丹椿園の読本作品についても漢籍典拠の解明に取り組んでいた。論文「伊丹椿園読本の典拠考」では、椿園の読本『唐錦』第二篇と第九篇がそれぞれ明清時代の白話小説『西湖佳話』と『石點頭』に、『翁草』第二篇が宋代の類書『太平広記』に取材したことを明らかにした上で、椿園読本の翻案方法と翻案意識を指摘した。

今後は、初期読本の未解明の典拠をさらに明らかにし、新たな視点から初期読本作家における漢籍受容の有様を捉え直す。

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

1. 「都賀庭鐘《義経磐石伝》典拠考」、劉菲菲、《国語と国文学》96巻6号
東京大学国語国文学会，2019年6月。
2. 「日本江戸時代对明清文学之接受－基于都贺庭钟读本小说素材来源的考察」(査読中)。
「伊丹椿園読本の典拠考」(投稿予定)

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)